

偉大な建築物は日本でも権力や経済力の象徴でしたが、イエス様の時代でも同じでした。しかし、イエス様は人間が造る建造物など跡形もなく破壊される物であり、そのような物によって自信や生きる力を感じようとするのは空しいことだと話されたのです。実際、ヘロデが建築した神殿は、ユダヤの国を滅ぼし、人々に大変な災難をもたらすことになりました。

ヘロデ王が建築を始めた神殿は AD64 年に完成しましたがこの年はローマでやはり建築好きのネロ皇帝が、7 月にローマの貧民街を焼き払い、新しい町を建てようとした年です。ネロは放火したのはキリスト教徒だと言って迫害を始め、パウロもペトロもローマで殺害されました。AD66年にローマはエルサレム神殿の宝物を持ち出し、ユダヤ人が武装蜂起しました。AD70年にはエルサレム神殿が破壊され、60万～100万人が殺されました。このユダヤ戦争の最中に AD68年頃マルコによる福音書が書かれたと言われています。だからマルコは、「戦争は起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。これは産みの苦しみの始まりだ」と言われたイエス様のお言葉を重要な言葉として記録しているのです。

今、超覇権国家が衰退し、世界中が液状化現象を起こしています。共産主義国家と言っても共産主義ではなく、社会主義国家と言っても社会主義ではなく、民主主義国家と言っても民主主義ではなく、単なる大衆迎合主義や世俗的繁栄至上主義です。政党も一貫性が無く、論理性がなく、哲学も思想もなく、政党名と現実はまるで逆ということが普通であるような世界になっています。人類の歴史は、長い目で見れば進歩とか進化ということと関係なく、退廃と退化の道を歩んでいるように感じます。

内村鑑三が「後世への最大遺物」という冊子の中で、後世の人々に役立つ偉大な遺物とは、土建工事を遺すことでも、金を遺すことでも、思想を遺すことでもなく、勇ましく高尚な生涯を遺して死ぬことである。勇ましく高尚な生涯とは、この世の中は悪魔が支配する世の中ではなく、神が支配する世の中であるということ信じ、希望を持って生きることであると言っています。私は、人に希望を持つということは愛することだと思います。人に勝つことではなく、愛して共に生きることであると。これほど難しいものはありません。しかし、これほど人々を慰め励まし生きる喜びを与えるものはありません。対立を乗り越え、和解を生み出し、共に神様に感謝して生きる事に勝る偉大な仕事はありません。